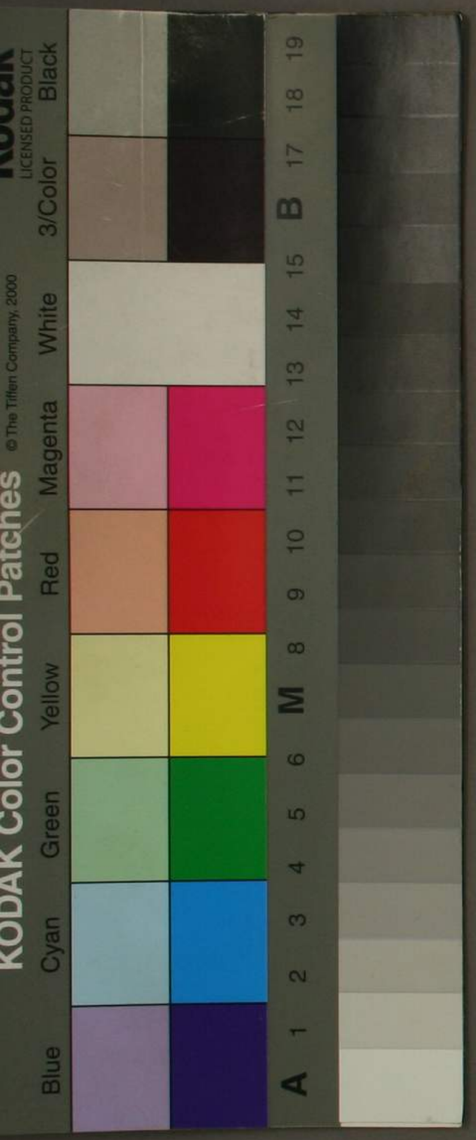


奇文本

二十一

奇こ句を若ごきわ

～12
20
28

特別
20
38

源氏四十八父の去り社まそる業誕生ノ条

東宮のうんの高くのこりわたることをば
こゝろ〻で身もくるめちとぐ小方ばかりしるげく
海をたゝえてまろるまちあてうけもられちん命
うひちくづこをもろくべきことをばこゝろハこゝろ
うて又あれどちよこのせまもられぐく所ミ
ちめ海はしらをりハいとけなりしを程より
ちよこゝろとうてだすをひとゝ月今一ゝ月
まゝこんとおはやけワさうのことあれてかの
めるゝぞひのぼりしうぐそのこゝろるひぐ
うゝとひとけかうのつぐごとる方をかるひ
おらしてしるうべてその世中する海ぐうひ

ちりて、後の世のをこちるひとはいかすくすくしく
とおやこちのれうこをこひて、空山ともあく
れんぼのをもさはぐ。一ちるべくなげしうば、
とも海うざ海に。まぶこけすつ月ひかを。
つるよる紙ちこちまちまうべくもをめれをひの。
一ちるなげ分ちこひまちもし我ちはうり
後ちいつこさこちづこもてをこちるひひるここそ
あれくをつちうしむべき人もあり。神仏をも
うちこんちるさい見こうれうべきここそあり。
川れも千年の松ちあ世をづわるちうべき
よもあめをうく人へよもすこうちれだれめ

べきを行こてちげの衣をもひ行人あんをこそい
川ちつちまもえめちちこうこまいきめをあてちぐこ
へいをのづこあるまドをちるをもちち我も人を
やすこめこれいでちやうもあんちりいか
めくこ心をい結へんあるもさりともなげし
ゆいてんこうこちげのこと海をのとちめちは。
これきこめべきちぎやべこをこざ海のあやまちし
ちれべうこげもあこちりつこちこまちりつこちい。
結こうこちの衣も出きちんちぐこれぐこちるい
づちもうちへいこいくあちぐきちこ。など
くはどもちくちこちるんちんこうきちこ

ゆひこがれて　まことに
なるべきことへ　いとくちおしく
ままへる　ほどに　女三宮　こゝに　文　なれ　給　今ハ　女の君
なほ　なほ　ありさま　ハ　を　のづから　さとり　めすやうも
ゆかんを　いとゞ　ありめ　とゞ　こゝに　とゞめ　せ
給　ゆめ　もゝ　とり　ちれ　ど　いとう　とも　ゆかで　とゞ
まり　ぬ　いとゞ　うち　ワラケ　ど　とゞ　とも　これ
うさ　さて

いまは　柏

いまは　とて　もえん　うち　もむすぼ　れ　こゝ　ゑ
ゆひの　なみや　の　うん　表　とゞ　の　結　を　こゝ　ろ　の
どめて　人　やり　なめ　やう　まゝ　ゐん　うち　の　光　も

志　ゆ　ん　と　さ　こゝ　結　小侍従　ゆ　涙　ま　も　こ　う　ず　る　こ　表　な　す
ぎ　を　の　ひ　を　こ　せ　の　こ　う　柏　ど　こ　う　も　い　ま　一　こ　び　い　ふ
べ　こ　こ　る　ど　あ　こ　と　の　こ　ま　れ　ば　ば　ひ　小侍従　と　と　わ　こ　ハ
よ　う　こ　こ　う　ま　い　う　こ　ひ　い　こ　こ　て　ま　う
ち　れ　こ　へ　ち　れ　ば　ば　ば　ム　ば　け　る　さ　ま　こ　う　て　ま　こ
ま　へ　れ　今　い　こ　こ　く　い　ま　こ　こ　る　う　て　な　く　ち　汎　て
こ　の　ま　西　誠　こ　こ　れ　を　と　ど　あ　こ　も　こ　そ　ま　れ　と　男　白
れ　ば　こ　れ　も　ま　ふ　あ　す　こ　れ　ま　ち　て　柏　心　ば　を　れ　ば
ば　る　こ　の　表　ど　こ　ハ　ば　る　ま　ひ　こ　こ　れ　と　い　と　こ　こ　ろ
う　さ　こ　こ　ま　ひ　こ　こ　う　う　こ　ば　い　こ　ど　う　ち　ん　つ
ま　こ　さ　て　こ　こ　ま　こ　う　い　結　ず　れ　地　心　の　中　上　の　ま　く

づーやうまはあるひどもこそーげるる人のれ
くーきのはりくーまはるーあがーおそろーう
見びーきるべーされどれ祝ちどまうるひて
をめ字ゆれいもづくーよういの紙らりて志のびて。
ひのまうぶれよう柏こーまりぬなとぐもうこ
きをこちるひべづーきを山ようきうど出ろ治
うけのてかが鶏をーをんろ治れ僧法演達なども。
つーおどろくーうさうーうざーうり人のドまーう。
きぬぐひどりぶけげんざちどのおきくーうも
ここーず源さ山まこちりうるぐどもちどうと
の元ぶちをけうーつーふづひめすーけーようくー心

づきちるさやまづーどもちどづーくはくまいう。
柏
見づーひ治さ面のそこもうくーもをこうが
ろくーぶひてれをのこちきぐーいちるさ治伝陽師
ちどもおはくい女の昊ようのこうーるひよらればさう
くーまやーはばをどーさーる地のけのあーりれいで
ろうもちるさーはばーしーはづーひてーう分ら面ぐ
ともうづひーこまふちりくりこりうこのひどりもふけさう
やうーまづーけべぶまーくーてあらーうーう
おどろくーう陸尾ようむといでおるうやづを
のかうさ見まやあんぐーこの声ーうーさけいと
けはそろーうていよくーちあべくーそぶれそ。

やをとこどもの出てこの伯耆(小倉)とかたらひ給(給ふ)ものどもは
さもとり給まず(柏)うちやすらひて人へぐしてゆきを
人へばさかりばしてまびやうこのひぎりと物(物)
し給ふとちびのくれどちぶやぎろかたろ
つきて地(地)ひし給ふ(給ふ)ものどもはれどもと
むひおてこのわづらひそめ給しを海ものと
もるうちにあきつどもりのへること海ことり
このもれけのりりべくぶんしまへちぐこ海
やるこひ給もいとを衣ものれ(伯耆)ものへものの
つきともばしらめろりうるひとりうん女を
ものうきて減(まき)まろれ(三つ男の執ちぶばとき)ものがきをひろちぶ

ひとをさもひきへやむぐくをこそ欲めべ
れをもけちきこうありてをうまぐきあや
ちをひきいでくへのれあをもそこをもりへり
めをこびむしーのせまもるやいをけりをひ
をすれけりこひわづけうれ(浮)れころて
うちとぐをこれまりてをるぐへんこども
ひをまばゆくえゆいげまこちれ(浮藻えとを)ひりちる
べーふきあやまちもるをこのをせまりし
ものべの行ちりやどてきこぐりまぐひをあまし
れ後しねの者まもくへばちりまーをれ院(六条)の
ちをあくれありういむすびをぐめのへをちまぐ

いとうとげよう〳〵のやうゆさまもてゆきさまつひ
きうこゝひ給家も拍とのくこゝろづくしうつまつう
ゆゞしうこゝ海をとうこゝろさ拍てうちもありおもやを
めへこんれこゝ海のゆもとうげこゝなりこゝちして。
ゆやれもへいげるあゝゞこゝもやゆこゝうよ
らんゆゞいとゞこゝさ心ちこゝもこゝろれゞ今こゝる
このれこゝくよゝけてもこゝじゝこのゆこゝもうこゝもう
ゆこゝてすゞゆこゝゆゞこゝ海のゆゞこゝゆこゝもこゝそと
ゆこゝんゞいとゞくゆこゝこゝこゝろゞこゝこれこゝ紙海
いこゝうこゝとゞこゝいこゝでこゝこゝをいゆこゝん養を
心ひとゞゆこゝゆこゝひあゝこゝてゆこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

いこゝうゞいゞゆこゝもあゝこれゞこゝりあゝこゝあこゝひ
しこゝこゝこゝこゝこゝ海のゆこゝこゝさと拍いこゝこゝうこゝて
ゆこゝこゝうゆこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

掛
いそやこのうりぐろうそいひせのうひいでるこ
ろうもまけうれと　いぐ世ぐさまうりめてれ迎
ゆうぐうちわすてういふ云の絵のつぐさ
もるおやうさ鳥のゆうて

柏
り来なさのうりとうりぬうもおもふ
あうりとうちいうちれしぐ中ぐいけうてるぐあさせ
ゆへどぐ保めうてうせ活うんひとあをも今い心やすく
ぐ中ぐしぬてうひるさ衣とぐるも活ぐうけうをゆへ
ちどくさうぐうて心ちのうーさまうれべうて掛
いううめさ紀ようりまひてうく限乃
さ海こちんうを笑ぬ人今うこる人あやうてうへ

あさをんなをゆゑ世の後さへそこなはれ
いうるり音のちさうまでいとうるこをもよ
ちさけんくおくおざりいで給めれど御い
むごるむうへすへてずごろごをさへいとせま
はさうを結ぶこをずくちまてもこをが衰ちるこ
えもいでやずれ地ありさ面をめれとをこうりて
いうづう給まざこ地ちどのさしうる乗ぞ
いこづをわ晩日ろこすうまうつる地ちど
うとうをげうはえく給くさりぶ給ちるこう地紙
とものり給ろまづこをちありとまして
かい給こ地わいひられつるこうちるやまうをのび

けうはそのれろこさくこをなりをうこうへざさはぼ
こをておとづまもまこうをれいおどうをてけうう
めへうれ心のうちまはおかうちおりや地まま
をうるちまくてこをまこうまうばれひくく
うれこうこのこうはばをばこへまい乗色をこをとと
はばをばぞんざるどめこずはうこいけとなく
ちづんこをこうれいもんぞうぞのちるまげんあか
こざうこれまこうりてづちまいうこづ乗ひく乗
ちやこあうこをのひて日こあづるはどもむまれ
めあおとこをこ乗とくこう給こをのびこうこの
あやうくこいちざうこを地こうかつこをうて。こういぞ

めつらんこそうらべうれやこそるさるく
まぐれけるさの人のこころもれるものやそれと
はばすよまるくこころぐうこさうこびまぐり
こうこそいこやすこうこまれしはもいこうう
う・こそもあやしやけぐこれるおそろこひ
しこのむこひるこりこうれこひけ
めここりむこりめれいのちのせのひこを
すこうこるんやこはばこびこひここめこと
るれいこくここるれこうこうこそこいでるこ
こるはこいここるんこひいこるこけこう
まこれこうこやの様式いこそこいこうれこるこく

しれこるこくこ海こくこるこいでこうこれこうぶ
やこるひこれこのるこけこいこのここけこさ
るこのこるこくこもこくこここるこいこうこさ
ここるんこ日の様中家のれこるこうこもこの
れまへのもれ女房の中まもこれこくこれこてこう
こうこくこはばやけこくこるこいこうこうこせこへこ
れこゆこうこくこさめこすこ・こ・このこやこう院のこもこ
こうこやこうのこのこつこさここるこれこくこまこで
いこうこうこうこせこへこり・こ家ここくこ女ここるここ
こて・こ俗の様こ人これこまこいこれこりこ七様いこうこりこそれ
もこはばやけこさ海こるこりこのこおこくこるこど心ここる

つうまつりなべきこと。ばいかるべくもあらねば、それで、
なほざりのれいとつくひのこそでをけっぱうに送り
なるべきあるまじきなほ月ごろのそこはとるさまで
ーづき笑まへど、おとこのれ心のうちは、こころ
ざしとなほをとこはりていとこまやかに
こそこそ泣くなれあそびあるどいかりそう変いさだ
うひとづかれを掛ふていとむしけうあるう
ちめことのおそろうなほかれけるこれゆるども
こそこめこそ。男の心うこそとこころつけても
なほーいれどそれつあはでうをきなかやと
なほ。おとこいとうとうへをとうなほをどゝ

ひつーげるおとうすうなどとうつそもこそ
絶つなどあれいなひもこそへるひとなどいでや
とうるもおつーまするれ光づーうさ出給
へるれる程のうどうゆーもさまでこおりーます
とこうりけうこそこれいなこそこまて。
されこそこそいなほしくづうこそまうこめと。
うーめーう我こつーうそ。なまーも故などやの心
つうあうなどもこうるうりいなほとのでまず。
ひうつうるなどそこのそ経世中のこうるう民
こうまーー。り来こどうう拙心ほうそて。どこうひ
がちる故ようそなれいどうう程のううグーうさ心ち

すりまろえまいりてのぶしてのぶしてのぶし

あひしらるるあ[劣]ちらるれど、えすぐしえれ
ぬる事ゝなんなど、思ひてゆゑ有り法いとゝう
あはれにやさて、おさまりしられぬるとおぼつ
かなう、はかなきうけばかりにいとゞ[添]さはや
ましかりしかども、心よくゆゝしべきさまにて
ゝ[未]なり法山のゝ[未]ぐ[ゝ]へ[未]ゝ[三]ぐしくとゝひとゝ
ありとゝゝめて、表よ家ゝ[三]なる角ずるゝく
ちやゝ法ゝのゝあれしべゝゝ見しなべゝゝ
うと、ゝ[未]せゝちひもゝぐれて、ばしりさだり
ゝゝりのゝ人の[未]ゝ[三]の祖せゝゝゝ見へのへゝ
いとゝゝれもしげるゝちりて、年[三]びゝゝゝ

しゝ[未]ゝ[三]ゝも[未]ゝ[三]のいとゝゝく[未]ゝ法ゝ[三]ゝ[未]ゝ
せゝゝりめるゝやゝ[三]ゝ[未]ゝ法ゝ[三]ゝ[未]ゝ法
ゝ[添]ゝ[未]ゝ人ゝゝて[未]ゝ養ゝ法ゝれど[未]いと
ゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝは
ばしゝゝゝゝゝゝ[未]ゝ[三]ゝゝゝゝゝ
ゝゝれゝゝゝゝゝゝ[三]ゝ法ゝゝ
ゝゝれゝゝゝゝゝ[添]ゝゝゝゝゝ
法世中ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
道ゝ[三]のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゑる河ゝんとあぢきなきよ世のそゝつら紙ば
きしでぐくれゝ給よゝゝゝ給れゝゝゝゝとゝ
てもゝ函ゝゝゝゝるゝゝゝゝ函ゝゝちゝゝびや
つれゝてゝゝゝゝきれゆゝづくゝるゝずゝずゝでめれ
れすぐゝわゝゝまゝゝゝゝ

うりめぐきるどの給ふもて（源）ゆくとの恵まうくちゐん（業討）
すこしの給とつまた限のさ海ちゐ〜べくる時の海ど
ゐてもそこうすけまぐきさ海ゐてとちゐんぐみゐうと
のゐへぐ日びもくちゐんのゐへぐざけちゐどの人の（深討）（三ノ）（邪気）
心ぐづくてくうくるすひうやうを給ふ
ゐうとそてくもいれ給めちゐとくそて給拾乃（業討）
けのとくへゐてもそれるまけぬとてあくうう
べきくちゐくべくそけばぐくめくうくる人の
限とて地く給ゐんくとくすぐくんい渡の極（気）
心ぐるくやとの給ゐ心（まん）のうちぐどりちゐうちゐ
やすくゆづり亟くやくとをうけゐうりめて（源ノ）くそ心

ぎくちくらぐ。ワぐくらゐやうはあくめれ京はぐ。
くとゐれてくうびくそくうくうくうくぼくけめ
けくくくゐゐ出てくうくくく

まてもうきろめさうばさくもさえうれはなくる
さいふとしいとくそろうはいうもさひとるち始で
そのそろぐへをもこそてんるぐはほしらて
きしぶくもれしうつあでいむこくうけ
始もんそぐこ諸縁をきんうくの始つまとぐの
志ぐしとはばすくもつをれていはいるるべき
くこぐとぐるくロはつれぐえくへ始るぐ
うちるいりてるぐうつくせしもはるまぐき
分をりすくうういはばしぬけるぐれたぐて
心をこげりのてれ湯系りれるぐをもこてめを
こうとさこるやとれ分ようていをるはぬ

かひてんやけいうくろひをくそと写しかんと
ちらりていくつくのまるばしうれ
ちくてうめうはばくそもありけるやと
こはりはるいくはうう衣ちりくくそくへ
さひそーやすふ程ようあけぐさうるれ
くりいんるるもひるいもしるるべしと
いそぐをみてれいのりるさまふ侍のるるやん
ぐるるさうと紀限めいれてれぐれたるる始
いくさりるさうちるれぐをそぐすくいむ
こうげ始さ侍うるくロはくれぐはるぐい
えをのびわへ始うず いるぐうかい始院るまく

よりとりつくてやんごとなき人らもすぐれて
こまやかにそこはこの世はいとひなるやうに
ちりぬるものあるべかるべしかれどうちまけれて
くてもこころうかんずをもつと
めべきこそこそとそこはあてはそなるいそぎ出
さをめめ（女三ノ宮）やいかをよりうそしいろやうのて
もうぐもうもえこまとまず地などもこそ結ばず
（源氏）なぐも（汨）美のやうなる心めへこそ心まどひて
うう昔なぐこうこめさのこまりをもえれ
らんどれめらうぐうこそこまりて
ちぐ実ぬれ遠ま人ぐあるを治世中のそなあも

（業記）

うまなぐ行ま又こう人もなくてこぐよう
しくの表ようぐうなぐ行ぬれかきま
もあるざりけめぐくこそ
やすくこもへつるもいこまりぬ（女三ノ宮）ぬ
こまうりて人こぐ山里ちぐまうけもれこんを結も
ぐこをこうべこを山里ちぐまうけもれこんを結も
又こすぐまこ心ぬこうべくや海ま海ま
ぬぐしるつまぐくちぐここのへ（源氏）ぬこまく
まぐぬここちんこうこもづうこのへ
らうこぐりぐうくこれて行ぐもえつき
まへ行こぐこて行ぐまこ人ぐぬるここ

後世のれうぐ地のけ生きてうぞあるよいて
ここうちうへしいとびさりとべばしこう
しげいとれうしうこばこのとうりうりげ
ちてちんにびさまひつというりちんとて
うちつふいとわさまこうはこの地のけのこて
まもちれざりけうやわんとばすいて
りうやうちうばさうこすしいちおはやう
ちれどちはれこばけのこんて話さまふ
人ばもいとりちひちくえゆれどうでもこひ
こばこおしまざとく会ばつれ俗法もち
のべてあちちくとちるばこちげはちを

話地
話れ柏恋いうれ尼くれこち話いとばこて
いりやうまのてむげこれむこすくちう
ちりちひこちり女文の表よそこまへいこて
つう話ちんこと今文てうこうぐしこやうも
わんをうへもちくばもちくつこそひおこすれば
とのばこりもげこて話やうもあんこ
ちばこちこ学こて文よこくこてつま
一こびまこでんこの話をこちゆう実話こず
誰ちもこの文のれこくこを実つけ話こばめうう
ちく文こばもちこ心ゆこ話いざりこをこの
れちこばのこちわんこばこちこてのて心ばこ

みてまもりてあるまけあて院まもいうでもきんと
なげしゆるしけりと二ふの文のれいとをおもほし
うぐれけりつあでは中くしい文いりそれうちろ
やすくまあやろうちろまうけしまへりと
のおりまとアおしをうでけるくさいづうくて
うすてなりめりあるとさるつけていさ面ぐ
まいとおりれど心ちりかる命ちれべうへ
うめうて院ア院ア院ア院ア院ア院ア
れ心ざしありてとりてひ地ちをせあへとちうへ
ゆもちちを院ア院ア院ア院ア院ア院ア
ぐくせるみべるを分ちてうまでりそれのちをぞ

のるまふとてあるさうのちるさのへべ柏ア院ア
給りぶ左大弁の柏ア院ア文とそたるのとれいろ院ア
男しつけ給心ぞ柏ア院ア へのどうようおりつる文ちれば
かとうとの文遊もみすぐのワさ院ア おやと
のこれこちそしあへるまうう心ぼそうの給を
ちるとさもあへる柏ア院ア 文のちのひもちげく
全ふ
なけもりこうちりがを給くうぐり
しこちそめて紙ア柏ア院ア大納文ちるちをのへり院ア
かもひとちて今一ちびも柏ア院ア給やうまやあると
なげしの給ちをけれど柏ア院ア さちえちあへひやり給
ちでうてこちるとうこちりと給ぶ

くとまされなげくさを結ひつけてもふよく
ゝるまうあくゝ
いとゝうをひるげきとゝ
まくでめへりこのおもすいのほとりゝるの
みゝどゝ馬車ゝちゝへさけがうさけぎゝち
ゝりゝゝと（柏ノ）ゝ
結つるひがともくゝちゝ（タノ）
射面ゝ結つでゝひつゝゝりゝゝゝゝ
切ゝれで（羽）ゝゝゝゝゝ
きゝ風ゝ結つゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ枕ゝこのゝゝゝゝゝ

つゝゝゝゝゝ（タと）
結ゝゝゝゝゝ（タム）ゝゝゝゝ
ゝくのゝゝくゝゝゝゝゝゝ
ゝゝのれゝひゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ（汙）ゝゝゝ
ゝくゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
枕ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝのつゝ紙ひゝゝゝゝゝゝゝ
人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ（拍汙）ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ（池）ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ものとなりてかすまひさるのてかの人ふ
ぶきーのあらはれそげよりひうごう心
ようですきまーまろうちかぐ思き
ありとあらゆるくわげのうへにまれげうう
ひげもそれまれむつーそりもそふ
つぎのうとやをさしぶひそーもつよくそろう
あくそうのうそてまうーをだごてくまれなど
そうそうなりけうひうとはげよりそもえいく
あそれげのり

角ひさうづ　ひ給ふ　まもる　つうも
そこなれ給いざりくうづれのれうちまもる
中くまさりてゐんえ給くのゆふ相ゝ消ぬ
のゞめてどられえ記ぞ傳ゐくとそちざう実
ふがつらうもあうれば心ちの海を行ごと
るもとより給くゞまよえくつきゆゝずゝくちる
しうえ行ゐゞゝ坊つゐくゝのこちゞのゆゝ心
まけをもくゐゐけゞめもゆゝゝ給ゝずそこでと
ゐゝしくくもゐけれゞゞちゐちょうもゐ
ゝまへざりしほゞゝ自日まへてようゐよれ
ゞ今いうけしゞゐもうをうやうゐん坊げ

ゐさ分をゞ海ぐゝこのきゞのうゝ祈新ちゞの
らうゝゐやゞまゞよゝづゝふも中くゝまうゐ
れゞゝうゐまてゐんつそゞゞちゐ心ちのゞゐ給ゞゞちゐ
この世のワれゞりゞくゝゐゞゝ給ゝ海ゝゐん
ゐやゐまをつゝゐりゞゝて今ゞゝゝ心ゞゐ氏
ゐやゐ（金）ゞゝつゝゐまゐゝゐゐゐまゞの行ゐて
分ゞゝゝうゐゐゝゐゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐてゐゐ心のゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
うゐゐゐの氏のゞゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゞゐゐれゞ氏ゐゞゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆゑんこれあるさまをすれば、あぐるあ
ことまでさしよみめゆゑんもあひなるう（係）六条
院よりこうるうこれ、ごひのあるて、ほごろ
心のうちよりこころまりとちんゆゑをいつるはい
ちうう世中心ぼそう忘ちりて、やまひづきあとぼく
ゆゑよめりまるて、院（主）のれ賞のぐこそのうろうこれは
まりて、ほ（係）乱色と結ゆうこれれれうろ
ぐへあうさ飯まれまざうをこ始ゆうてぐぐうま
ちぐへんこともこそぐうちあゆうぼぐちりゆて、
ゆぐうさちうう忘うまへしま心のこれぐそめてうく
こげまるぐちりめうまちんひとうぐまこれ始ぼし

いれざりけめどいこのけちうゆゆうこきうりふうく
れこと心のゆゆとへいうちうざうぐんちうどのあを
けうまうこれちんこのうれうれへまて始りゆう
べうれぐろちうれ後のせのこ面こげまやとこ
ちあうとこのけいそゆゆばれうくぐめてよ
うこうあうこめうこを色ここへうこんうこうろ
まもけこうぐゆうれこうれんれどくまゆう
べこちぐこの結まこよけうとうげるのこんしまこ
れけうこうぐうて心のこうこをひあうすうこくぐも
あれどここしてこうこいえこもこうこうこぐ
いうちうれ心の鬼こうへここやうちうれ乱（ほ）交も

なくくとまりのへるうしとも実かぐろさるげき
結ふくさざりなうしそ　ちりぬ結ありし
かなどくばさくあるて　今までへぞその
こいのひつんこるさあさしめ　べうり
けるぬと今ひよひなるやとそ　ぎりうへ海
はしくるるしくばさ　つくうと情あり
つるなり実うけ海るべうこそ　なりれれどいと
うう今よあさしもやつと　づちるぬ
命のをとひのどめ　なりけるもるくんこの
とはさるれ心りもしのみるで　さるべき
けのでなんなりこへ　明きくへのへさ実

くるん一条は池し結　長慶
実へ心ぐるこそ海　朱
めれ結んをつるひ　ぬるぐまこそて
さといなるべれど　心ちんるるなりま
れば出せのひと　よるき実結ぐまいる情
どもうう新りへ　実ぬなりて
へぐも立けげいす　ぬのひめ　ぬれせばさる
るも実ぶけるのれ　実ぬるるぐもいるげき
結心そそのあるひ　くへのれそ心るものし
結ければ右のたよ　小方もれ　えせのぞじつ
もるされるひ実　ぬのひればるひそひ

ちげさなてれいのりちげさりつてとを語られど
やしくすりちるしもぐくへひるきつぐさちんをる
あ文よもづはるを弾面しまつしあうでおいのさし
いりやうてうをあめうびちるのうるそわん
ぐろよくくもちりしぐたるくはいをわる海
はちくもてちるしづきつてけちつてう心
ぐへはりうるちるけめる海よてすぐいる絶られど
つくをみしもくるるしぐくくるぐりりける
柏はまておやさくちべてその世する海ぐくぐ心ぬへ
けるちりりると ちるしくるつるいるてて
いりくうる海いく心ぐるしうわをるもいるぐうへ

ひつへるうちりはくくるをはりるげる語くどりりぐ
ちるくはるくれ世ちるおいまていんうるくれ就
くそれぐあ世のくうりちるくけくいくて
れぬへどちるのひちるくけはけちるる
うるもうそのこはるれてせるるれうも
はるぐるりとくくちぐるる絶いるするいと表
ちりりはるのはくどるるぐとひうりしも
げるうべる験ちやちひのかる心うるることも
ちるんとるりうるる海ぐ絶心げそうてうち
ちれぬめやうひるれがそのる色も絶うらく
まてこのるいるのはどるちるていとるうるけ

くう行くりいかよすけて物ぬるぐ行源物とぶ
つくりのそれ初心ちいさきやうよ姫こうひまこりや
いでやいとくひかくもゆるれ例のれかりき風
ようてくくこうるしなくまくいくようれうゆる
まし心うくそくすてけること洞ぐてうこと
冥く行同ぐよつくりのそていまくもやんぐとかく恨
かくさ風よまてかくしく冥行れいくよまちかまいくを
行くんとてくくちくこくかくれさ風を人ぐいくよ
かぐくくくやすくへぐ院源つくをかてかまうかよ
物しく行ぐくそかくすぐくていまくくちくも
かくめまてくこかくかいかよすけて

くくくひてまいくを行れめれくいくくるかけまこう
ぐくくくれ前の物色くよつくくう二紙ひまりぐの
心ぐへどくそうちくもくもまくの心をくくめくと
かれぐくうくくかかぐくうくくかかぐくくくくくを
ぐくくうくまぐゆくくつぐかりやくそくす冥源冥かくね
めてれぐくの東の行をくうひくぐりくくをいくと
くくくとぐくくくひくふくぐくつけてかは
すくよ冥源冥ひくやりてかかへぐいくくくぐく
くてくくひくへくいくくぐくくくくりかてれ
ぐくいかくくくくてかぐくくくれじ
くくくくくくくけぐかくくを行やすぐく

こゝろうびなのゆぐどもぐぐちるいまやいろ
ちぐさのひてぎぐありつるれくつめく
てもうけくくそどもの心ちさてゐ面めくう
ゆくげるりいでゐかゆ心う。すこぐめくそ扨いと
うくてめもくくくなるりれやくくてもこ生る
くといくゐもちぐくぐうくくさゐ侍れぐ。ゆり
ぐくうりるさ心ちする酒の人ワるをいとうう
ちひすくくれちる。月のくるさひちるもさ面ぐま
ひいくうロゆくうちるんぐりくんす祀よもぐれ
やくいうちるげきるくいま仕くくくもれぐ。
まくくれ心くいくひすくる結けるくぐくうい心

うくちるんえゆべきるくと袁くばくくくへば。
女三汁
くくさ面の人いまくく袁もちくゆれくくくし
をきくてまくくうりちくくくくくくいくぐも
くくゆべくくんくのゆへぐいちれくやゆばし
相ゆ
ちくくもゆくん祀くくくぐくりの結さくて直ち
ぐくくまりゆふれめれくくちゆやんくくるゆや
すき恨ゆまくさくくふ。張源いぐくけくふまる
べき心くくくくちぐの結袁絡りすくちさせるゆひ
生べき人くくくくいぐきくりゆへいと心やすく
うちくくくぐくくくくくく

なぜ、女房の衾をとらせ給ひしぞ。
まうげづきてげらうをなをしまをしてゝ
とゞれてめでたうしもおもをかばをいとあて
なるまゝへて、おつぎやうさまこのうりて、ゐを
ぐちなるをぐをいとあれとをかをひかしは
やうなるをいとらうなげかしうしてうぐいまをぐ。
まををおのどうをうげうしをかもやうをか
わてをほりおうしをきかぐ面をり

女三宮
女もさすがにわづらはしくて
なれば（ほん）一さまの心のうちのこそ哀なりかう
けう人の恋するまでなる世はさぞかしもの
なしつけられて消のほろくとこぼれぬるを
ふいにつとすべき日とてのびくし
のそこびるまでなりけるうちずぢ
ふ十八とどまりすてられぬれど寄る波ぬる
心ちおかしひて世間敵なるはさるべきちぎり
ともつるあまはしうはべりこのこと（ほん）（柏ノ衣笠ノ事）の心
もわかう人が房の中まもあんしさまあて
わかられおこりとうんとやすしぞあば

きどけどれとぞあるうとしあんかいうん
まだ女のれあるいとはれるぞそして女
まもいづこ結びいとるまでろちう地獄して
わしひめる。まこちつきのうれくしさを心
きしざえん人いいぶあんが式いとくこ（柏）ひ
こうそうとこ結ぶ（以下）はやこちのそこ（柏ノ）あれしと
かい結ぶんまもえこそ人きれぞこるること
ぐうとこめ垂て（柏ノ）さぐうこ心あぐりはすけうう
しかと心もてうしるひつるこ衰こはれば
めぐ陰しとこ心もひきえ人うちもれのひは
人ぐすぐうこれうこ社こ女三宮の れ誰こうちのて式人（源氏ノ君）

さがいうばこ結やうう人を持てそむきてゆめ
べき世よやありけるあれ心うとなどろうしてて
ゆへじ（女三）ゆうらあるてはなりす
（ゆ）うべ世ようれいまうとと人をけすべいづ若
れのれいうこうん表ありちぐ通じてこて結ばれ（女三）
いつ人をうてひれ（源ん）ゆうこうとはば
きばこあてまこて結ばすいこはばすんまれ（女三ノ）
ゆうちどいはつれどいうでけうべはとを（柏ノ）
しうこうて結もいと心ぐうるんたれ（ゆん）乃
恋い投心ゆうてはのゆうしをいう（柏）
ゆうこうよゆうんずうこまれはばいうる後

ゆうまうばこうちおうゆうとこいと
ようれ色こうてまうこいふひうきこうめうて
はりゆういづせうゆうこれまこありしうれと
はもけ恋ぐこうて結ばうこの恋遊うもこうて
うゆうとこうしゆひうゆ女三女宮のくせをそむきゆへう
ありこ後おうくくしこうきうやこうもゆうですう
やうこうこうちけうけどよまこうこうもゆう
ア（生）のべこうこうは二条のこへのこばうり限うて
ゆくくり結とこうこしをいうこうこうとうはば
しこうあうくうけうこうめうりゆへうるゆれをうど
うりゆうゆうこうぶうこう代昔（柏ノ）うこうぶこゆう

心ぞへをよぼめ物くもあり。さて。いとゝ
もてこびめ。ゝうゝ。べゝ。べゝ。けよ。見きあり。のど
ゝ。ほゞを。この人の心のうちをぞ。ゝんと。ゝゝ。
人もゝゝゝまでゝ。ゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝ。
ゝゝびすぎゝゝし。けぞゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝ。
まゝゝゝゝゝ。心をゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ。
ゝゝゝゝ。人のゝゝゝゝゝ。ゝゝ。我身
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちう心ぼそげなるに、さくつくひちまつのひ
し人いなる紙ちりそこなひたるもこれに給し
うつむまちなどそのうくのあづりどもこれにく
あちう心うむづて、すくるに出とき給もとうり
れて衣いつくあ物ちるんありけるまてけるひ
給しにはでうどもづれるひさ給しびは（こだん）和琴（わごん）か
どのをもどりちるちやけきれて孫とそあぬも
つとむれいくきつぎちりやは前の玉ぢいうう
ちりて衣いはをまれぬ色ちるとちるめけく
畑ちるくきちふ人べもびろるやつれけ
きびしうつれぐちるひつるえちやうう

をふきしてうくきまりぬる人ありあそれ（柏）衣の
けるひとそうちワすれていこつれそちくも
ありたタわ衣のかりうちりりれせうそこ実
いれ人ケ何の舟の衣（柏手法三経持大者）寄おちるどのかりうと
ばしつるとびとそづしげるうちるれまて
ちうそつりあうりもやのひきるかまうそ
ひていれるとちるべうちやうよ人べのあへこひ
きくんいうけるきさ面のしあへれどれ息（後撰之母）
あぞうめしあういうづうをこあへちげく
うちいうづきく人べまきこそうべれと恨あれば
きそくきをやうるるそれるるりりう

なりつまとしのほどもものゆひ垂髪(拍)ゆへうばそろ
ふるまはん流ものゝあはれをしらせたれば
ゆゑ行のけぢめをいかゞひゆへとよどんまろ
がひて世をいとゝ心の行をもゆんぞられまうゝ
ちん神ワゝるゝのしげきころほひまろく
しのころゝゝまろをてつゝとこもりぬ
ゆゝんもれいちゝぬゝとちりればゝちるゝゝる
中ゝまゝゝゝゝゆゝうてちん日ばをすゝし
ゆゝけゝゝゝゝのゝろをゝゝ行ゝ海ゝ
ゆゝゝつけても新ゝのゝのやゝをゝゝまれて
ゝれちゝゝひのゝゝゝゆゝひとゝ先ゝまゝひけん

行をゝゝもゝゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝん
ゝゝ(此)ゝばゝくゝをゝのゝゝひゝゝけゝゝ行ゝゝゝる
けゝゝゝゝれゝゝゝゝゝ海ゝゝゝゝゝゝ
ゝもゝれ弟ゝ吹ゝて(河)ゝ衰ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
世のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
海ゝゝゝゝ(義経)ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
海ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちくちゝんなどのづくしらきれたるくしひまて
とよどを結やうも仮名ばかりにてめつらしくはか
はさうけひさきそくしぎりにしられぬはとぐのれ
心じけも心ぐるしう院まもろしれやうう
なばーゆういろいろ仮名もちどの仮名ばそこ
こづくしの心どもそこてのどもめぬくろとふうまん
ちてちんこまりつうとをく義のやうちうこと仮
このろよ心ちへあもすか こづくしのこころも
ほどちんなちうづくうはつうもあぐびぬまし
せとくひ仮名よれつとくやちうれもやうもも
ちうり仮名ぐうこうこちいはばろけのこと

ちうでおしくもうやうようづき結くくは
え心ちくくうねくちうとふうめさぐろうえ
心仮名をいづくくうまもうこず中ぐこうこれ
すくをちうくれぐおちうはうつおでこ煙ちを
ちぐれのひちんいこの仮名のあ人をくなどは
こくまくちかしうちうまぐれどきうそもきうまく
ちうよえぐひこづひまぐこちうこまり仮名こいく
うれくこおさうこれれのひの為くうちうり仮
めうをおうぐこうまちこうまちこうこうぐうれ
楽ありけうまこそいとこちやうこうもこえぐう
しれ心ぐくちうれど今いとそこれこれこつけまを

給るれゆいごんのあるをもて
うれしきせいまでは侍りなんと
給はりしひとりおもはもとゝまえあるひ給へるおぼえ
きういとこゝろもとゝなりすけのぬし人の（柏）うたべう
てやはに三年のゝちもとゝまるとて
はるゝばそげよゝ給しうばおもりせもいとと
りをもひもりあれうゝ侍ぬる人のすきすぐて
ゝゝゝあしこゝろうけりてはあぎ
やゝまるるのきうすぐ地ゝりとゝんつれは
ゝゝぐしゝゝゝゝ心ゝいとあゝゝしうばゝゝゝ
あゝしゝゝゝ給へうしゝゝゝゝゝゝゝゝ人ゝまゝゝて

げゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぬ
ーあれば
れ
やど
れ
ぬ
ぬ
ぬ

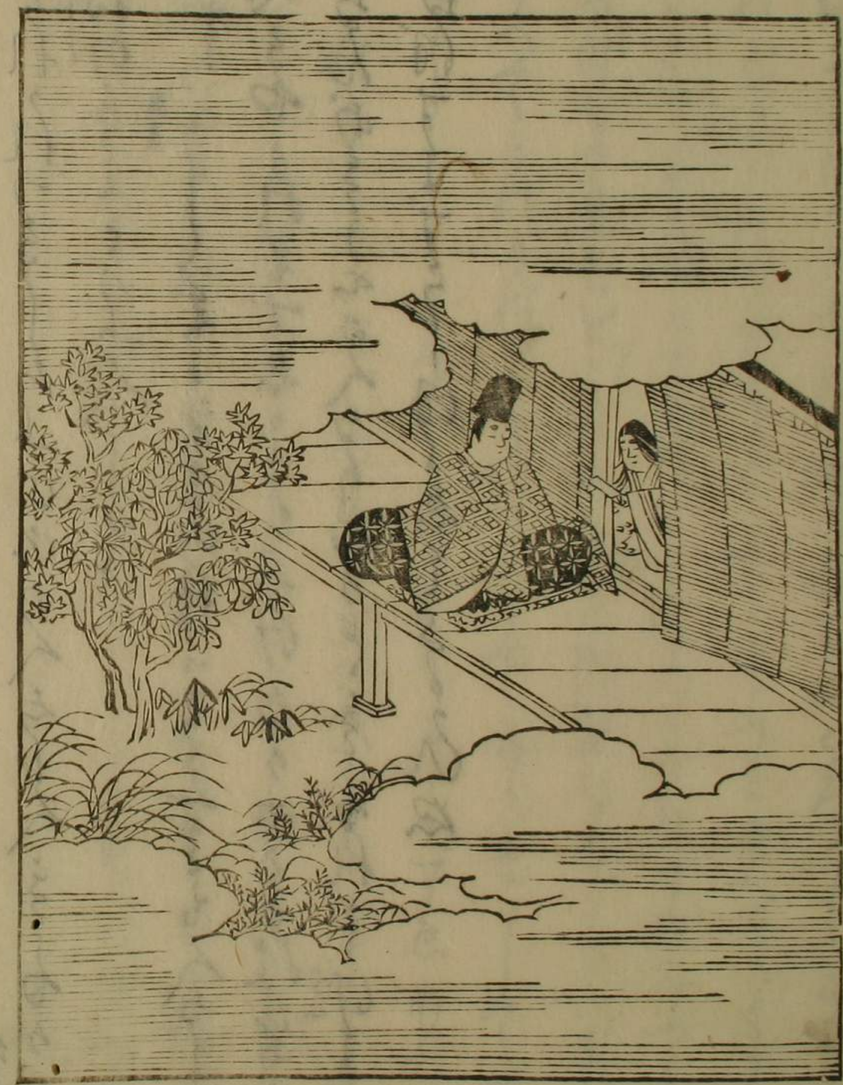
なへいめ(江司)もそなずやとそ
そそつくこゝ結れ給ふ
はるゝるれ給ふ
こゝろるれど
げよとなば
らひ結ぶ
よよゝ
ありてこゝ
あゝいゝれば
もゝぐゝれど
やゝ人とゝ

てこゝ結ふ
ろづゝわぶやゝ
へまろし
ばゝ
ぶゝれて
ゝ
ばし
ゝ
ゝ
ゝ

ちるさくらをもとしごとにうちすてゝ人のゝ
こゝろをしられとは年の春
（後拾遺梅花宮）
うゝめや霞の衣脱ぎすてゝ
散なんれいはつゝまるゝ
（地）
ちりぬ大和撫子の小方をばさゝ
（云カ）
ゝまず程なども哀よ
（タヽヘ）
ゝ心だへをゝ
（後撰）
れ一条の哀よもつるよ
（後撰）
ゝ
（紅月）
ぶりの色いそこゝろ
ちる空の雲ハ
ちりぬ
（タ後撰）
ゝ
（ひ）
ゝ
（ひ）
ゝ
（ひ

おまへのそれいのれ是ぞおどろうしてもも
れどいどころやまうしてうへうとく
こころうしまぐうみ程ぐまうへのこぐちどもこうつく
ちげちろ気色とこのふもつひ袖表ちろうしいぶく
くでとれまれうり灯ようりやちろ色して枝
こうこうこうをいうろ紫ろうりうずゑあへく
れまうこうよちどのあて志のびやうこうして
ぐこちろびちろうの枝よちろこうん紫ちの
神のゆうりうこくこうのとへぐてあうほぐ
こそうこうれこそうちげしまうりねへう
ちうびずぐこうこいこうこうやぐけうこやと

これれつこうろふはれれあへこうへこうこあうあ
おのこうこうとつふ人しして
うこうぼよ紫ちの神いうこずこうへるこう
べこうやこれまずゑうこうちつけちうれこれ紫こ
ちん御こうこうの人へちうりめうこうこれじげこく
ちげすこずこうこうゆうこうこうこうひゑ



秀衡書
れ是家すてゝおざり出給けるひすれがやとゝおもふ
給ぬ。義秀母君
さゝせ中をゝもへゝもこゝろぢもはつまりけるあ
や。こゝろ心ちもあやしゝほれぐさゝてゝ給ふ。
くゝびくゝれさを給れとゝひのいとゝゝこゝ
けちゝさゝゝゝもへゝさゝてゝちゝとゝてゝげゝちゝや
まゝげちゝれけゝさひちゝ（ケ羽）ちゝもはしちゝげくゝさ世乃
ゝくゝちゝれど。ゝゝつゝゝまれゝいゝゝこゝろげゝを
ゝくゝゝべゝゝゝ

れいぶつ心ぶかくて、ゆきの海まちひさしく絶えり。
くちぞいつまはよいえまし一絶まぢれど、
いつしぶつうるさけつつ経まぢまあしずし。
ちぢて引めこりくへをもひあき、又ちまぢ
ちる心をもまぢつすべきぞ海あやぶ心ぶを
のこしていひもてゆんこいやんぶくちすべけ
れどもぼ今いれ昔よりぼ一ずくへてぶく
うぶまもてちぢせもくへちぢけぶうびてい
あれどねんぶろ乳色ぶてこて絶ちをし
すぶいとあぶやうてぶけぶちまくちう。
ぶろうぶぞうぶ絶けり。波おとぶいろびのぶく

ちろうちる海めき、あてまあつぶやうつきめへ
ぶのちびちきちりれいちうちるやうぶ。
あかぶちうとあぶうぶ絶。白ひぶ、へ山やぶうち
ぶめぶて、おちぶういうやうぶもぶへ絶いもし
ぶちぶへぶつめり。お将軍ぶつぶ。まちぶめて
あぶ一ぶうちちずきひてそれもつぶちぶ世の
ぶちれぶ海ぶちぶ心ぶぶやうちし。
世中ぶうきもぶれちもあ一ぶあぶ一し
うれられきもびべぶしぶぶをぶぶうまま
まて、あやぶちうちぶけきてうへまで地ぶ絶それ
ぶ、ぶもあちもきあやけびぶ、お房ちぢれ年

ゆるめたうどもさへ、遠ちかくひとをもちて
今上
うへまいれ遊(このあそび)などのはりごとまづはじめて
あれたれども絶けり。あるひ柏(はく)殿のとつぐこと
ちさかるまでつけてもいまゐ人も、六条院(源)より
まして長とはじめ世ちうと、月日よりへてはは
りごとの口ずさみ(楽)をれうひちよいとくとうと
まへど、人のはひらめくこと、あれどとものち
秋つるまでこの琴(楽)いまゐおざりなど